

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：12701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590088

研究課題名(和文) 知識基盤社会における職業活動の持続可能性に関する研究

研究課題名(英文) Sustainability of Occupational Activities in Knowledge-based Society

研究代表者

志田 基与師 (SHIDA, Kiyoshi)

横浜国立大学・大学院環境情報研究院・教授

研究者番号：90178872

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：AIの発達により、職業の多くが消滅するといわれる中、安定した分業と職業体系を見通すことが困難となり、職業「体系」の「持続可能性」はその概念自体を見直す必要がある。他方で、職業が「経済的自立の基礎」であるためには、極めて長期にわたる教育課程と正規雇用で代表される安定した就業構造が必要であるが、前者の構造化に対し、後者の不透明化(「持続可能性」の不確実化)は、一種の社会的リスクとなっている。こうした職業観の基礎にあるのは、ウェーバーの指摘する「プロテスタンティズムの倫理」による「天職」観であり、このテーマはこの古典的な成果との対決であるといえる。

研究成果の概要(英文)：With the development of AI, it is said that many occupations will disappear, it is difficult to see stable division of labor and occupation system, and "sustainability" of occupation "system" needs to reexamine its concept itself. On the other hand, in order for occupations to be "the foundation of economic independence", a very long-term curriculum and a stable employment structure represented by regular employment are necessary, but for the former, the latter uncertainty ("Uncertainty of sustainability") is a kind of social risk. The origin of such a view of occupation is the view of "Beruf" by "ethics of Protestantism" according to Weber, and this theme can be said to be a confrontation with this classic result.

研究分野：社会学

キーワード：職業 知識基盤社会 共感 勤労のエートス 社会的連帯 AIと職業の消滅

1. 研究開始当初の背景

職業的な分業と社会的な連帯との関係は、アダム・スミスの『諸国民の富』においては同情心に基づく連帯を社会的共通資本として社会に利益をもたらすとされるが、エミール・デュルケームの『社会分業論』では、職業的異質性は社会の連帯を無条件にはもたらさないものと考えられている。また、社会学において職業が階層と階層移動を記述するための記述枠組みとして採用されると、職業が社会的分業に果している意義と役割は背景に退いて、主として収入と威信とをもたらすサンクションの体系として職業階層構造が主題化されるようになった。

しかしながら、これまでの社会学における職業概念と分業概念の取り扱いは、知識基盤社会におけるイノベーションの重要性やそれに付随する専門的知識の不確実性から生じるリスクを十分に織り込んだものとは言い難い。高度で新規な技術、斬新で独創的な意匠こそが商品となる知識基盤社会において、職業遂行に求められることは知識・技術の更新・創造であり、そのことが専門的職業に基づく分業に高度の信頼（リスクを取って紐帯を結ぶこと）を要求する。また、そうした分業体系を維持するための、評価や認証の果たす役割は知的公共財・社会関係資本としてますます重要となる。

他方で、職業の持つ社会的な重みは「非正規雇用」や「ニート」「フリーター」の問題のように個人化され、社会保障などの場当たりの施策の対象となっている。職業選択は職能が高度化するにつれ、やり直しのきかない性格を帯びてくるという知識基盤社会における職業的社会的変化を、古典的な職業観に無理やり押し込んだゆえの認識の誤りであろう。

以上のことは、(とくに高等)教育システムや職業移動を通じての社会階層構成に、あるいは人々のライフコースに大きなインパクトをもたらすと考えられるが、現行の職業観・分業観のままでは、このような知識基盤社会の行く末を見通すことは困難である。

2. 研究の目的

知識基盤社会における「職業」のもつ意義を再検討して、職業とイノベーションと階層形成の関係を明らかにする。知識基盤社会ではすべての職業は専門職化し、不断のイノベーションを求められるものとなる。つまり職能は生涯進歩することを求められる持続可能なものでなければならない。他方職業活動が、専門職能化するにつれ、職業は高度なトレーニングを必要とするので、やり直しのきかない選択となる。この相矛盾する職業の様相が人々の職業選択(それはライフコース最大のイベントとなる)と階層形成にたいして、どのような意味を持つのかをさぐる。

3. 研究の方法

以下の4種類の方法を用いて、「知識基盤社会の様態」「そこにおける職業の様態」「そこにおける職業倫理」「同じく職業への社会化過程」について明らかにする。a) (テレビ会議をふくむ)研究メンバーによるブレインストーミング、KJ法、ワーキングペーパーの交換など、アイデアの相互交換と討議による精緻化、b)変容する職業にかんする文献、電子情報、ヒアリングによるデータ収集と分析、c)SSM研究の職歴データの再分析、d)ワークショップやWebページによる研究成果の公開を通じた議論の進化、である。

という計画であったが、実際に行われたのはほぼ a)の項目のみであり、わずかに b)の方法(ヒアリング)も取られた。

4. 研究成果

予定していた研究方法の実行は不十分ではあったものの、代表者と分担者の間で行われたブレインストーミングは「知識基盤社会における職業活動の持続可能性」について根底から検討を加えるのに十分な材料を提供するものであった。

次項の発表のほかに研究代表者、研究分担者は今後個別に研究成果の公表を行っていく予定である。概略は以下のようである。

職業活動の「持続可能性」について

1. 職業とは何か

1.1 職業と市場

ある知識なり技能なりで、(責任をもって)社会の需要に応え、対価としてそれに値するものを受け取る活動。

対比:趣味の活動(その活動自体に内的報酬がある、やること自体に意味のある活動)、「オレオレ詐欺」「職業左翼(?)」「違法な活動(ヤクザ)。

ただ、縄文時代にも交易はあったようで、「自給自足 分業」という図式は必ずしも当たらない。

もともと「職業」の感覚は、宮廷や教会や軍隊での分業に由来するのではないか?(農村)共同体の自給自足性と隔たったfunctionの体系として、活動が析出?

市場が成立していることがきわめて重要。「職業の世襲」がある社会の職業は? 自給自足の経済は?

奉仕活動・無償ボランティアとは違う。職業人が分業の中で、社会に貢献し、自らの生存も保証する。

お駄賃を貰うのとも違う(cf. アルバイト的労働観: ドルフマン『ドナルドダックを読む』)。

アカウントビリティがある活動

期待の体系の中で、一定程度の存続可能性がある(一過性の、再現性のない仕事は、職業ではなく臨時の雇用か、別の職能の一時的な移転のような形で処理される。町内一斉清

掃、職場の机の整理、お茶汲み)。また、同様にコンスタントに人を養う程度に業務が存在することが必要。

反例はたくさんある：杜氏(のような季節労働)、ブドウの収穫、お祭りの地回り、正月飾りの作成・・・最近はやりのウーバー(?)は？労働のパケット化(ピザラ?の宅配員)。

とくにコミュニティや近代家族システムの変容と福祉国家の進展は「経済的自立の基礎」として職業が成立することを自明の前提とはしなくなりつつある。職業の持つ意味の変化は、それを中心に結晶化する社会の地位役割体系の自明性を失わせる。

個々人が、生存する、生活するのに、職業以外の方法をとるとすればどうなるか？

自給自足を(ロビンソン・クルーソー、引退後の「田舎暮らし」、前述)たかり、お情けにすぎ、社会保障の対象、あるいは、ピンハネ、権力、搾取。ある種の外部経済。所有権からの剰余価値。現在では、資本家の投資業務ですら、invention 発明 industry 勤勉の側面をもつ「業務」である。

市場がある、ということは、長期的には需要に見合った適切な職業が適切なレートで仕事をするようになることを意味する。

需要が多く供給の少ない仕事は価格である労働賃金(など・威信や権力なども社会学者としては見逃せない)が上昇、その逆では下降。

ホワイトカラー管理的労働は、その供給源が高等教育を受けた者(大卒者)であり、慢性的にその需要を満たせないものであった(それで「サラリーマンは気楽な稼業」、やむを得ず、企業内教習(OJT、企業学校)や中等学校卒業者にたいする夜学等が存在。現在の「就活」騒ぎは、この需給が釣り合いつつあることを意味している。

1.2 職業と専門分化 division specialization professionalization

市場を通じた分業の大きな特徴は仕事が専門化し細分化する、ということ。

専門分化は、効率性を保証(?)する。

専門分化は、その専門の計算可能性(予測可能性)に強く依存。

専門分化は、職業の高度化・不可逆的な特殊化・代替不可能性を生み出す(「天職」の発見)。

もはや(継続的な)単純労働などない。上で述べたように、継続的に仕事を作り出すことができないような場面において「単純労働」は需要される。それゆえ、単純労働は不安定雇用たらざるをえない。

専門分化は、最終的には専門職(能)化 professionalization を帰結する。1)その仕

事の内容は高度であるから、専門外以外の人間が理解することに困難が伴う、2)同様にして専門外の人間が評価することに困難が伴う、3)それにふさわしい人間かをスクリーニングする教育制度・資格制度は専門家の元に置かれる、4)専門家による「自治」。

professionalization は、タコソボ化するだけではなく、内側と外側を峻別し、異なる倫理的要求を適用するという意味で、「共同体化」を伴う。すべての機能集団はゆっくりと確実にヤクザ化。専門という制度がもつモラルハザードの側面。

小室直樹が指摘した「機能集団の共同体化」の応用問題としてこうなる。社会を豊かにし、分業を効率化するための専門分化が、やがて分業の基礎を揺るがす。官僚制の逆機能の応用問題でもある。

たとえば、法律学は、専門外の人にもものを言わせない、ということによって成り立っている。人文社会系の「専門」の多くがこの側面をもつ。専門を支える知的基盤があって専門ができるのではなく、専門であることが必要であって知的基盤を「創造」する(目的と手段あるいは原因と結果が逆)。

理工系の専門分野は多くは「装置」のもつ制約による。そしてそれは、予算と人手とをより効率的に集中的に投下することの必要による。

小保方さんの問題は、科学者の活動が「だます気がなく」「検討に値する内容」であれば「事後的に」「間違っていない」「無答責」で、最初の「だます気がない」かどうかがポイント。じつは、これは研究者の内面に属することで倫理の問題。プロの仕事は「良心」そのもの。

ウソのような話だが、「常温核融合」は現実らしい。

1.3 知識基盤社会と職業

人間の知識は、生物の DNA 情報と違って、移転可能(自由にコピーが作れる)、移転可能であることによって、人間社会は飛躍的に豊かになった(レシピの普及)。

知識の大きな領域に「ノウハウ」があり、職業はこの塊。

パラダイムの存在が、同様に専門分化による逆機能に陥る(意図せざる結果)。

知的財産権(特許・意匠・著作権などの各権利)は、資本主義の所有権 ownership にならば authorship として猛威を振るいつつある。

2. 職業の持続可能性

2.1 職業の持続可能性(1)マクロ?の側面

ある職業が、時間的に継続して存続すること

それによって、社会はある種の需要に応え

る役割があることを前提に生きていける

困った例：魔法瓶の内瓶（ガラス）が壊れた、誰にどうやって直して貰う？ インターネット・タウンページに情報が無い。「メーカーに聞け」。

IT化の進行によって、10年後には今はない職業に就く人が三分の一（？）

ということは、なくなる職業もたくさんある。

邦文タイピスト、キーパンチャー、バスの車掌（横浜市営地下鉄では電車の車掌すらいない、一部のライナーでは、運転士すら）、エレベーター・ガール（ボーイ）、大学教員の大部分も整理されるであろう。

消えていくときは、それでも痕跡が残る。新しい職業が出現した（それもある程度安定した形で）というのはどの時点で言えるのであろうか？ 『事物起源』的なもの。小野妹子がお菓子の始祖となっているような？

2.2 職業の持続可能性（2）ミクロ？の側面

職業が「経済的自立の基礎」であるためには、極めて長期にわたる教育課程と正規雇用に代表される安定した就業構造が必要であるが、前者の構造化に対し、後者の不透明化（「持続可能性」の不確実化）は、一種の社会的リスクとなっている。

職業には一定の技能なり心構えが必要で、その職業遂行（役割）にむけての社会化過程が必要。職業を得るための訓練・教育。

時間と手間を掛けて（恐らく一生）その仕事ができるようになる。その訓練・教育にコストを支払う意味があるか、ペイするか？

自動車の自動運転が可能になれば、タクシー運転手、トラック運転手等の仕事がなくなる。

実際に仕事がなくなった人々はどうやってその後暮らす？

職業が安定して可視的であり、さらに少なくとも持続可能性が見えなければ人はそれに向かう志向性をもてない。

AIの発達により、職業の多くが消滅するといわれる中、安定した分業と職業体系を見通すことが困難となり、職業「体系」の「持続可能性」はその概念自体を見直す必要がある。

それは、個人的な資質で持続可能性が低いときと同様である（相撲取り 廃業 ちゃんこ料理屋、実際はほとんどないことらしい）。キャリア形成は、簡単に言うと、既存の十分に可視的で少なくとも計算可能性のありそうな職業をつないでイメージされる現象。しかし、今はない職業がキャリアの各段階に出現し、選択し、対応する必要があるとされれば、我々の人生はとてつもなく難しいものになる。少なくとも長期的な視野で職業選択をすることはとてつもないギャンブルとなる。中教審答申が、20世紀おわりに教育の目的を「生きる力」としか言えなかったのはきわ

めて意味深長。一般的な「地頭」や知的能力、コミュニケーション能力、リーダーシップ力、などといった怪しげなものに集約される何か。「能力」へ向けての自己形成しかキャリア形成の方向は定義できない。能力はpotentialでperformanceではない。にもかかわらず、現代の資本主義社会では結果としてあらわれるperformanceにしかpayされない。リスク（不確実性）が支配する社会において、誠実で合理的なキャリア形成が、良い結果を生むとは限らないというジレンマ。勝間和代的な生き方も「黒字倒産」の可能性がある、いわゆる「セーフティネット」が必要不可欠である。

これまでの職業観の基礎にあるのは、ウェーバーの指摘する「プロテスタンティズムの倫理」による「天職」観であり、このテーマはこの古典的な成果との対決であるといえる。すでにわれわれ「おしまいの人々（ニッチェ=ウェーバー的資本主義の走狗）」にとっては「天職」すら存在しないのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

都築一治「職業の二極化が機械的/有機的連帯におよぼす効果」『流通経済大学社会学部論叢』27巻(2017年)77-94頁。(査読なし)

都築一治「階級境界構造の考察」『流通経済大学社会学部論叢』第25巻(2015年)231-242頁。(査読なし)

〔学会発表〕(計 2件)

志田基与師「コミュニケーションと共感の社会学(2)」(2017年3月14日第63回数理社会学学会大会、関西大学)。

志田基与師「コミュニケーションと共感の社会学(1)」(2016年8月28日第62回数理社会学学会大会、金沢大学)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

志田 基与師 (SHIIDA Kiyoshi) 横浜国立大学・大学院環境情報研究院・教授

研究者番号：90178872

(2) 研究分担者

与謝野 有紀 (YOSANO Arinori) 関西大学・社会学部・教授

研究者番号：00230673

都築 一治 (TSUZUKI Kazuharu) 流通経済大学・社会学部・教授

研究者番号：20180028